詩語としての日本語

折口信夫

青空文庫

銘酊船

さてわれらこの日より星を注ぎて乳汁色の
海原の詩に浴しつゝ緑なす瑠璃を啖ひ行けば
こゝ吃水線は恍惚として蒼ぐもり
折から水死人のたゞ一人想ひに沈み降り行く

見よその蒼色忽然として色を染め
金紅色の日の下にわれを忘れし揺蕩は
酒精よりもなほ強く汝が立琴も歌ひえぬ
愛執の苦き赤痣を醸すなり

アルチュル・ランボオ
小林秀雄

この援用文は、幸福な美しい引例として、短い私の論文の最初にかかげるのである。この幸福な引証すら、不幸な一面を以て触れて来るということは、自余の数千百篇の泰西詩が、われわれにこういう風にしか受け取られていないのだということを示す、最もふさわしい証拠になってくれている。象徴派の詩篇の、国語に訳出せられたものは、実に夥しい数である。だが凡、こんな風にわれわれの理会力を逆立て、穿り考えて見ても結局、到底わからない、と溜息を吐かせるに過ぎない。こう言う経験を正直に告白したい人は、ずいぶん多いのではないかと思うのである。

小林秀雄さんの翻訳技術がこれ程発揮せられていながら、それでいて、原詩の、幻想と現実とが並行し、語の翳と暈との相かさなり靡きあう趣きが、言下に心深く沁み入って行くと言うわけにはいかない。此は唯この詩の場合に限ったことではなく、凡象徴派の詩である以上は、誰の作品、誰の訳詩を見ても、もっと難解であり、晦渋であるのが、普通なのである。そう言うことのあった度に、早合点で謙遜なわれわれは、理会に煉熟していない自分を恥じて来たものだ。併し其は、私たちの罪でもなく、又多くの場合、訳述者の咎でもないことが、段々わかって来た。それは国語と国語とが違い、又国語と国語とにしみこんでいる表現の習慣の違いから来ている。日本の国語に翻し後づけて行った詩のことばことばが、らんぼおやぼおどれいるや、そう言った人の育って来、又人々の特殊化して行ったそれぞれの国語の陰影を吸収して行かないのである。

われわれの友人の多くは、外国の象徴詩を国語に翻訳したその瞬間、自分たちの予期せなかった訳文の、目の前に展っているのを見て、驚いたことであろう。その人が原作に忠実な詩人であればある程、訳詩がちっとも、もとの姿をうつしていないことに悲観したことが察せられる。それほど日本語は、象徴詩人の欲するような隈々を持っていないのである。単に象徴性能のある言語や詞章を求めれば、日本古代の豊富な律文集のうちから探り出すことはそう困難なことではない。だが、所謂象徴詩人の象徴詩に現れた言語の、厳格な意味における象徴性と言うものは、実際蒲原有明さんの象徴詩の試作の示されるまでは、夢想もしなかったことだった。私はまだ覚えている。そうした、氏の何番目かの作物に、「朝なり、やがて川筋は……」と言う風に改ったと覚えている）をもって始まる短篇の発表のあった時、我々の心はある

感情の籠ったとよみを挙げた、あの感動の記憶を失わないでいる。ただ一種の心うごき――楽しいとも不安なとも、何とも名状の出来ぬ動揺の起ったものであった。もっと我々が静かに思い見る事が出来たのだったら、日本語が全く経験のない発想の突発に、驚きのそよぎを立てていたかも知れないのである。それでも、蒲原氏、ひきつづいて薄田泣菫さん以下の人々の象徴詩に、相当にわれわれにも理会の出来るものが現れた。それを今くり返して見ると、そう言うのは、多くは、譬喩詩に過ぎなかった。われわれは、譬喩詩の持っている鍵をもって、象徴詩を開いたものと思い違えていたこともあったのである。その当時上田敏さん等の仲間で、蒲原氏の創作詩の解き難い部分をふらんす作業であった。全くの見物にすぎなかったわれわれの見る所では、本道に象徴と言う事を人々が理会したのは、これからの事だった。物訣りのよい当時の評論家角田浩々歌客すら、象徴と、興体の詩とを一つにしていた時代である。上田氏の為事は、多くの若い象徴詩人のよい糧となって行った。けれども多くの詩篇は、あまり表現の手馴れた、日本的のものになりすぎていて、どうかすると、平明な抒情詩でもある様に見えたのであった。三木露風氏・北原白秋氏その他の人々の象徴詩と言われたものも、だから上田氏式な象徴詩の理会に立って出来たものであった訣である。だがそれでいて、誰も満足はしていなかった。おそらくこのほかにまだ象徴詩の領分があるのだろうと思っていたらしい事は、考えられる。何よりも讃うべきは、若い時代にすぐれた感受を持った詩人たちの多かった事である。その後四十年、日本詩壇では、其昔詩の若かった時代のままに、象徴詩は栄えている。此間に、われわれが眺めていた象徴詩の動きはどうだったろう。詩人たちはあまり日本化せられた象徴詩が、泰西の象徴詩と縁遠くなっている事を感じた。これを救うには、詩語或は詞章の文体に限って、ふらんす其外の象徴派詩人のもつ言語・詞章そのままにしたてるほかはないと考えた。日本語を欧洲の文体にすると言う事は、詩自身ふらんす語・どいつ語その外の語で書くと言うのと同じ事であって、日本語で詩を作る事にはならない。国語は、そうした象徴詩の国々と、語族が違い過ぎていた。其上ろうま方言の国境外に遠く離れている日本語による詩人であるがために、――譬えば、りるけが故郷以外の二三個国の言葉で表現したように、又極めて稀な例として、ヨネ・ノグチがあめりか英語で詩を書いた様には行かなかった。それで苦しい中から、最、適当な方法が考え出されて来た。国語に訳された泰西の詩の翻訳文体を学ぶ事である。相当に日本化した、と言っても直訳手法に沿うた文体は、上田氏の「海潮音」の訳詩の様にはこなれていない。其所にある程度まで、西洋象徴詩のおもかげが見られようと言うものである。象徴派詩人たちの訳詩集などに出て来る文体或は語句、言いかえれば、国語でありながら、詩の用語なる古典語や、標準語とは違った印象を与える詩語と文体が、目に立って多くなって来た。それに向けて更に出来るだけ自分の表現を近づけて行くと謂った方法が考えられて来たのである。これが成功すれば、外国語の文脈にうつして見た第二の国語の流れが現れて来ることになる訣である。だが最初にあげた小林氏の訳詩が見せているように、そう言う文体になじんだ専門詩人だけには、ある点まではやっと通じる文体とはなって来たが、其他一切の国語使用者――国民には、ただ印象の錯雑した不思議な文体としか感ぜられぬものになった。この儘に進んで行けば、専門家以外にも承認せられる文体が出来るかも知れぬが、

急にそうした自信は持てない。極めて晦渋な第二国語として、殆ど詩人圏だけに通用する階級語のようになって行くのではないかと思う。平易明快なばかりが、詩の価値ではない。白楽天・ろんぐふぇろう――が軽蔑される一面も、其点である。併し何としても、詩を生む心の豊かさから、いろんな表現が派生して、単純な理会者には受け取りにくいものがあると言う事も恥ずべき事ではない。併し二つの国語の接触・感染・影響と言う様な直接な効果ではなく、一種不思議な翻訳文が間に横わっていて、それの持つ原語とも、国語ともどちらにつかずの文体が、基礎になっているのでは、何としても健全とは言えぬ。我々の象徴詩に対して持つ情熱は決してそうしたえきぞちしずむを対象としているのではない。すでに有明・泣菫以来半世紀に近い象徴表現の努力がいまだに方法的に完成しないその前に、気移りしかけているのは誇るべき事ではない。如何にしても、時を経ただけの効果を収め得ていない。これは、詩語たる国語の障壁によるものである。その詩語は、実体からうつしたものでなく、その実体の影を写したものと言うべき用語と文体から出来ている所にあると思う。けれども詩語はどこまでも、第一国語と同じものでなくてはならぬと言う訣ではなく、第二国語として独立しないまでも、第一国語に対してもっと自由であってよい訣だ。そこに詩語の権威がある。第一国語から離れすぎていると言う事が誇るべき事でないと同じに、それに近いと言う事が必しも詩語の強みになる訣でもない。一口に言えば、詩語が現代語や近代語と同じものでなければならぬと言うことも、この理由から声高く主張する事は出来ない。われわれの生命をゆする程、われわれの感情に直截なものは、今使われている国語なのだから、詩語と日常語とが同じであると言う事は、一通りも二通りも考えてよいことだ。だが多く日常の第一国語は、詩語としての煉熟を経ていない。ただ生きたままの語である。この日常生活には極度に生活力をもった第一国語の生活力を、詩語としての生活力に換算するのが、今日の詩人の為事でもあり、大きな期待でもある。それの望まれない凡庸人にとっては、日常語は単なるまるたん棒である。丸太棒のもつ素朴な外貌に幻惑せられて、第一国語即詩語説を主張するだけなら、甚しい早合点である。だが場合によっては、現在の第一国語のほかに、用いて効果の期待出来ない題材がある。其は唯現実の生活を表現することにおいてのみ意味のある場合である。だが其すら、時としては、技術者の習練によって、第二国語――一層溯って詩語としての鍛錬を経た古語を用いて、効果をあげることがある。だがその場合は、現実のけばけばしさ、生なましさは、静かに底に沈んで柔かな光を放つであろう、が、これは一種のあなくろにずむに価値を置いて作る時に限るものである。これで見ても、詩は必しも現実の言葉を以て、表現するだけではなく、古語を置き替える事も自由なのだから、其所に現れて来るものも、あなくろにずむと言い棄てられぬことが多い。語自身が論理的でないことを示すようなものではない。言いかえれば、一種えきぞちっくな感情を持たせること、又それよりはもっと正しげに見える詩の古くからの習慣から割合いに高く評価せられて来た、其反感から、結果として逆に古語による文体は、実質以上に軽蔑せられている。併し現代語で――例えば中世以前の抒情詩を書く事は、論理的には正しくない様に見えるにかかわらず、今の詩人は多くこれを正しいものと認めるだろう。それは今人としての有力な一つの表現様式の文体であるから、拒む理由が無いのである。われわれが現

実詩をば、古語・中世語又は、近古語で列ねるのも、其と同じ事で、やはり一つの文体として認めねばならぬ。そこにあなくろにずむを考えるのは、第一国語としての錯誤感を及して来る訣なのである。古語が詩の文体の基礎として勢力を持った事が長く、詩は此による外はないとまで思われていた時期があまり続いたのである。古語表現を否定しようとするのは、その長い圧倒的な古語の勢力の時代に対する不快感を、まだ持ちつづけている訣なのである。

われわれにとって現代文が一番意味のある訣は、われわれが生存の手段として生命を懸けており、又それを生しも滅しもする程の関聯を持っている言葉は、現代語以外にはない。だからわれわれが生命を以てうちかかってゆく詩語は、現代語である訣なのである。これは単なる論理ではない。われわれの事実であり、われわれの生命である。この生命を持たない言語を、詩語として綴った場合には、それが古語でなくて、現代語であったとしても、其は全く意味のない努力になる。唯古語は近世又は中世以前の言葉であり、当然詩語としても生い先短い語である——人は詩語を第一国語にひき直してみて、或はすでに滅びた言葉として見ることがある。それは誤りであるとともに、生命のわれわれと強くつながっている現代語が、詩語としての生命を失った場合には、目もあてられないものとなる。それは言うまでもなく、第一国語に還元するからである。或は初めから詩語として用いられずに、対話の中のごろた石・丸太棒として転がっているに過ぎないからである。私などは、今の作者の中、最古語を使う者の内に這入る者である。併し私にとっては、古語は完全な第二国語である。私らの場合はむしろ外国語に持つ感覚に似たものを、古語に感じて其連接せられた文章の上に、生命を托しているのである。

外国語は全体としては、われわれと生命のつながりは、非常に乏しい。併し乏しいだけに、——切っても切れない、でも其を強いても断絶させて行かなければ、生命ある表現の出来ないと言う国語の系統や、類型から離れた表現が期待せられる。古語の場合もそれに似て、近代語の持つ平俗な関聯や、知識を截り放してしまう事が出来る。それだけに、親しみの点に於ては、われわれの今使っている第一国語と一つづきである祖先語だが、特別な語学的教養のある人以外には、まるきり外国語と同じものである。だから又、現在の言葉と関係のない古語である程、そこに効果が出る訣だ。唯言語の一部分に於て、われわれの知っている中世語或は古語の結びつきを見る事もある。時としてはその単語全体が、読者にとっては唯祖先語であると言うだけの親しみを感じさせるに過ぎないものもある。そういう古語が、平俗な口語文体の中にちらばらとはめ込まれているところから、一遍に凡庸な国語と感ぜられ、古語の持っているえきぞちっくな味すら受け容れられない場合のあるのが、最非難されるのである。

現在の詩壇の有様を見ると、ある部分まで、作家たちの詩は、日本語を忌避している様に見える。考えのある人は、自分の用いる言葉が、日本語的な印象を与え過ぎる事を嫌っている様にも見える。日本語が平俗だと考えている以上に、外国語の持っている様な陰翳を自在に浮べる事の出来ないのを悪んでいるのであろう。だから何のための詩語か。結局凡庸な表現力しか持たない日本語ではないか。而も現在と関係のない、どう祷っても転生する望みのない山の石の様な詩語に過ぎないのだ。——こう言う風に、特に詩語として用い

られた古語を見くびろうとする。だが明治以後どの詩派が、最古語を用いたか。それを考えると、我々の予期する所とは反対になっている。有明・泣菫以下の象徴詩勃興時代の詩人たちを見ると、皆驚くばかり古語を使っている。あの古語なんかに何の関係も持たない様に見える泡鳴すら、盛にこれを利用している。蒲原氏にも同様の傾向はあったが、――古語を活し、古語と近代語・現代語との調和の上に生命ある律的感覚の美しさを与えたのは、蒲原氏なのだが、――之を使った上から見れば、薄田氏の方が著しく多い。

薄田氏の詩には驚くばかり古語が取り込まれている。泣菫さんに驚く事は、私の様な古文体の研究を専門とする者にすら、生命の感じられない死語の摂取せられている事である。泣菫の語彙を批評した鉄幹は、極めて鄭重な言い廻しではあるが、極めて皮肉な語気を以て噂した（明星）。

たとえば「青水無月と言ふ語は、われ〳〵は辞書にすら見出す事は出来ないが、薄田氏だから拠り所があるに違ひない。美しい言葉だ」と言う風に。当時の詩人・文人の間に行われた勉強の一つで、辞書を読み、その美しい語を覚える、そう言う行き方の、泣菫さんにあり過ぎることを諷刺したものである。矮人をちひさご詩としての価値の乏しさを感ぜさせるのは何によるのか。直観的にわれわれはまず嫌悪を感じる。それはまだ詩の文体を発見しない時代であり、既に発見して居ても、平俗なばらっど――日本的に言えばくどき節――の臭気をさえ深く帯びて居た。言葉の排列が、独立した文体の感覚を起させれば、詩としての基礎と、更に詩としての価値の半分は出来上っているのだと言う反省などは、持つ事の出来ない時代であった。ある人々は、七五調四行の今様を準拠としようとし、ある人々は、五七連節の長歌によろうとした外は、漠然と西洋詩型に、生命を托しようとした。併し日本語をば西洋詩型に入れようとする事が、どう言う意味を持っているか、そう言うことの思われない啓蒙期であった。詩は発想であり、思想をまず生活化してその生活の律動によって、新しい詩型は生れる筈だったが、それを考える事すらしなかった初めの詩体は、決して初めの時代だけに終らなかった。晩翠が出て初期の詩形をある点まで急速に敷衍し、整頓して、ある一つの決著をつけた。其と共に、藤村は新しい詩の内容が、詩形を胎んで来る事を、ある程度まで実際に示して、若い日本の詩の世界を、喜びの有頂天にひき上げた。藤村の発見した詩は、若干の新しい思想と、或は生活と、これに適当した古語表現とが行き合った所に出たのである、まことに、藤村以前の詩は、抽象的に考えれば、古典的であった筈だが、実際は平俗な近代の演歌調の詞曲に成り上ろうとしていたに過ぎなかった。藤村の古語表現には、柳田國男先生（当時松岡）の啓発があって、一挙にあの境地に到達したものと観察せられるが、明治の詩であるためには、日本の古語のもっている民族的な風格が必要だったのである。近代人の摸索は、古語に観念的な内容を捉えようとしたのである。其が民族文学の主題であり、一言で言えば品格であった。柳田先生の与えた影響は、かく仄かなものとして過ぎたが、そう言えば、内容にも影響を見る事が出来る。「実をとりて胸にあつれば新なり。流離の憂ひ。海の日の沈むを見れば、たぎり落つ。異郷の涙」と言った藤村の「椰子の実」は、柳田先生の与えた最強い暗示から出た。藤村の事業は、古語が含んでいる憂いと、近代人の持つ感覚とを以て、まず文体を形づくったのである。そうした処に、思想ある形式が完成した。詩の品格は、そ

こに現れた。われわれは此品格を藤村にはじめて現れたものと見ている。外山正一さん以来、誰の詩にもそれを求める事が出来なかった。何よりも、その詩の音調の卑俗な事は、たとい新体詩史をどんなに激賞しても、中西梅花・宮崎湖処子を尊敬させはしないのである。北村透谷に於てすら殆、無思想を感じるのは、思想的内容を積む事の出来ない近代語を並列して居ったからである。近代語・現在語を以て思想表現をすることが、真の目的と考えられたことであろうか。それは今でも殆、実現の出来ていないことなのだから、まして此時代の人々に負わせてよい責任ではない。古語表現から言えば、落合直文門下の塩井・大町・武島の方々もあるが、これは、中世の語の滑らかさに溺れてしまっただけで、藤村が持っている若干の生の思想にすら到達する事も出来なかった。いささかの手違いのために、思想を持ちながら古語表現の完全に出来なかった先輩がある。北村透谷でなくて、却って湯浅半月氏であった。詩篇や讃美歌の持っている思想から、もっと宗教的な内容を持ったものへの企てが、半月さんの作物には沢山残っている。半月さんの場合にも悔まれる事は、詩語の選択を誤った事である。思想的内容の極めて乏しい平安朝語を基礎とした文体によって、彼の宗教をえがこうとした。私の未生以前明治十八年、「十二の石塚」を公表した人である。あれだけの内容を持ちながら、形式の、それに裏切る詩を作ることに止らせた。それに、当時の伝道文学者がそうであった様に——和歌に於ける池袋清風も同様——日本語を以て、西洋の、殊に信仰生活を、日本化して表そうとした矛盾が、半月集の持った筈の品格を失わせているのだ。

西洋古代の宗教文学に関する語彙は、三十年代になっても、繰り返された。それが後には「花詞」と選ぶ事のない程安易な物になったが。明治三十二年以後著しい短歌改革運動を行った新詩社の人々の短歌に収容した詩語は、やはりぎりしや・ろうま或はきりすと教の神話信仰に関した美しい詞であった。それを久しく用いて、多くの神話に現れる星や、愛を表現する花々を繰り返した結果、新詩社一派を星菫派と世間では言うようになった位である。ある方面から見れば、新詩社の新派短歌は新体詩運動が短歌に形を変えて現れたものと見るべきである。だから此所にも、新体詩の改革運動のように、平俗な思想を避けようとしながら、完成せぬ表現から、そう言う安易な作物が多く出て来た。そうして曲りなりにも思想らしいものの出て来たのは、鉄幹・晶子両氏が、古典研究を本気になって始めてからの事である。最初から新詩社に対抗していた正岡子規すらも、ぎりしや・ろうまの神話文学の影響を詩に取り入れようとした。唯それを日本的に表現しようとしたが、単なる直訳らしく見えるものを避けようとしている。而も短歌にすら其があった。名高い「佐保神の別れ悲しも。来む春に　またも逢ふべき我ならなくに」、日本神話の立田媛・佐保媛、その春の女神なる佐保媛を指すものとして古典的に感ぜられて来ているが、それはそういう風に、子規の全作物を整頓しての考えで、彼の詩を照し合せて見ると、やはりみゆうずやぶいなすをそういう風に言い表しただけであった。

明治十年・二十年代に安定の出来なかった新体詩の様式に対する感覚は、三十年に入ると同時に、ほぼ到達点を見る事が出来た。それは空想に耽っただけの西洋詩の様式や、我が国でこと古りた今様や、長歌の様式ではなかった。まず思想があって表現を駆使すると言う

考え方と結果においては、同じであった。まず語あって、其所に内容が生ずると言った行き方を、自らとって居たのである。その語は外国語を以てするのでない限り、――又それは出来る事ではないのだから――民族的な思想内容の深い様に感ぜられる、整頓し理想化した古語及び古語の排列からなる文体が、このときになって現れて来たのである。だがそれは、初めから一時的なものとしての条件がついていたと考えねばならない。つまり藤村の若菜集以下に出て来る文体は、日本人の思想的でない生活のほか感じられない――平安古語を基礎とした文体だったのである。だからどうしても、もう一つ安定した時代が先に考えられていたものと見てよい訣である。それは漠然としてわれわれに考えられる――最「古い言葉」の時代の語であった。記・紀などにある語を土台として、その中にそれ以前の言葉も、勿論それ以後の平安朝、近代の語までも、――学問的にでなく、古語としてある共通な感覚を持たせるものをひっくるめて、一様の古語とし、その古語の中で、民族文芸の憧憬を含んだものを、特に愛執することを知ったのである。即、そこに思想と気分との深い融合を認め得たのである。

われわれの考えた正しい詩形の時代は、意表外の姿をもって現れた。それが日本に於ける象徴詩の出現と言うことになったのである。その後四十年以上を経ているけれど、やはり日本の詩壇は、依然として象徴詩の時代である。

存外早く定型律破壊を唱導する所謂破調の詩の時代が来た。この長い年月に整理すべきものは整理しながら、やはり昔の象徴詩家が古語によせた情熱と同じものを、今の詩壇の人々の詩語や、文体の上に散見する事が出来る。象徴的な効果のある、言わばてまの代表とも言うべきものだから、それを離れては作物が意味を失うと考えられているのである。私どもが詩を読み始めてから、そうした幾百千の語を送迎したか、数え立てる事も出来ない。又作家自身も、それ程までの効果を考えずに、ただの言葉に対する情熱から使い捨てたと言うものも多かった。もし啓蒙的な新詩語彙と言うようなものが出来れば、そういう言葉を多く見出し、それらの言葉の中から、明治以後の詩人がどう言う言葉を好み、どういう傾向に思想を寄せていたかと言う事が、手取早く見られると思う。

久しく用いられている語を少しあげてみると、「しじま」これに、沈黙・静寂など漢字を宛てて天地の無言・絶対の寂寥など言った思想的な内容までも持たせているが、われわれは詩の読者として何度この言葉にゆき合うたか。併し辞書などには、それに似た解釈をしているとしても、其は作家が辞書から得た知識だからである。古い用法では、むしろ宗教的な一種の儀礼である。無言の行とも言うべき事であり、時としては黙戯を意味してもいる。併しそう言う私自身すらも、沈黙・静寂などの方が正しい第一義である様に感じる程、詩には使い古されて来た。

「あこがれ」この言葉も明治の詩以来古典の用語例が拡げて使われた。これは「あくがれ」という形もあるのであるが、詩語として承け渡した詩人たちは「こがる」と言う焦心を表す語に、接頭語あのついたものと感じた為に、「あこがれ」の方ばかり使った。これは、王朝に著しく見える語で、霊魂の遊離するを言った。自然、それほどひどく物思いする場合にも使っている。だから、詩語としての用法は恋愛的に柔かになっているが、特殊な意味を失っている。憧憬という宛て字は、半ば当っている。

象徴派風の表現が勢を得てから、「えやみ」（疫）だとか「すゆ」（饐ゆ）など言った辛い聯想を持った言葉が始終使われた。そうかと思うと、近代感覚を以て、古語にない言葉を作ったのもある。運命、宿命などに「さだめ」と言う全く一度も使った事の無い語を創造した。西洋的な情熱を表す必要から、接吻なども、国語で表そうとして、早くから「くちづけ」と言い始めて来たが、此も無い言葉で、寧、「くちぶれ」とでも言うべきところであった。王朝まで溯る事の出来る用語例は、「くちをすふ」と言うのもあり、もっと適当な古今に通じた言い方は、「くちをよす」或は、「くちよせ」であった。こういう風に、古語の不穿鑿と、造語欲から出来たものもある。山脈を「やまなみ」と言う事は、後に短歌にも広く用いられるが、やはり詩が初めであろう。これも言葉通り山のならび、つづいている峯を言うので、山脈に当る言葉ではなかった。これは成程勘違いをしそうな言葉である。これと同じ意味に於て、特殊な外国語を使ったり、仏語や東洋語を用いたりして、詩語の範囲は拡げられた。象徴派以前からも此風は盛んであったが、有明・泣菫氏以後甚しくなった時期がある。言語の異郷趣味を狙った点に於て、古語も外国語も一つであった。

一方破調の詩が盛んになって、むしろ定型によらない事が原則である様になって来たが、特殊な詩語は絶えては居ない。この破調の詩の行われる動機になったものは、小説に於ける自然主義の流行であるが、日本では、こう言う風に象徴派と自然派とが対立すると言った形を取って来たのが不思議である。外国に必至的なものであった象徴派・浪漫派の対立は、我が国では見る事が出来なかった。今から考えれば、日本の詩に限り、象徴派が即浪漫派であったと言う、不思議な姿を見せている。つまり我が国では、ろまんちっくな詩の運動は一足飛びに、理論的に象徴派に這入った事になる。それと共に、岩野泡鳴氏の様に、象徴派と自然派とを同時に歩んで居た者さえある。併しどちらかと言うと、我が国現在総べての詩人の所属しているほど盛んな象徴主義も、やはり大なり小なり自然主義を含んで来ている。唯、程度の差を以て作品並びに作家の流派を分ける事になっているのではないか。その意味に於て現在口語ばかりによって、現実の社会生活・政治意識を表現している一群が、象徴派に対する自然派運動を行うと言う外貌を持っていると見るべきであろう。此派の詩は、技巧意識を別にしているのだから、自ら文体に特殊な詩情を見せていないが、若し、個々の詩語の効果を没却して省みないと言う点があったら反省してよい。合理的な立場から言えば、当然現代語の構造によって発想してゆく詩が、有望である筈だが、詩の欲する言語・文体は、必しも今経過しながら在る現代語を以て、最上の表現性能を持ったものと考える訣にはいかない。われわれの詩が、当然未来を対象とせなければならない所に、重点を置いて考えれば、詩に於ては、未来語の開拓発見を疎にしてはならない。古典派である私なども、現在語ばかりを以てする詩の稽古もするが、時としてはそうして出来た作物が、まるで裸虫である様な気のする事がある。おそらく多くの場合、現実の観察や批評に過ぎなくて、それにつづく未来を、その文体から展き出そうとしていない点に、詩の喪失があるのであろう。私の話は、詩語としての古語を肯定した。併しこれは、最近までの歴史上の事実の肯定に過ぎない。そしてつづいて、詩に於ける現在語並びにその文体を悲観して来た。併しこれは、未来語発想と言うことを土台として考える時、もっと意

義を持って来る。単なる現代語は、現代の生活を構成するに適している、と言う様な合理論に満足出来ぬのである。未来語の出て来る土台として現在語を考えるのである。未来詩語・未来文体はどうして現れて来るか。これも空想としてやり過したくない。必、過去半世紀に渉る日本詩人たちの努力が、無意識ながらそうした方向に向いていただろう。それで、その暗示らしいものを生してゆくのが、最正しい道だろう。

ここに到って、私は最痛切に悲観した翻訳詩体を意味あるものとして、とりあげねばならなくなった。翻訳詩を目安として、新しい詩を展示しようとしている詩人たちの努力を無にせずにすむのである。詩の未来文体の模型として、詩人の大半が努力しているのが翻訳詩である。原作に対する翻訳者の理会力が、どんな場合にものを言うが、その理会が完全に日本語にうつして表現せられた場合は、そこに日本の詩が生れる訣である。「海潮音」に示された上田敏さんの外国詩に対する理会と、日本的な表現力は、多くの象徴詩などをすっかり日本の詩にしてしまった。

流れの岸の一もとは
み空の色のみづあさぎ
波こと／〃＼くくちづけし
波こと／〃＼く忘れゆく

われ人共に、すぐれた訳詩だと賞讃したものであるが、翻訳技術の巧みな事は勿論ながら、其所には原詩の色も香も、すっかり日本化せられて残った憾みが深い。詩の言葉の持っている国境性を、完全に理会させながら、原詩の意義を会得する事を以てわれわれは足りるとしなければならぬ。翻訳せられる対象は、勿論文学であるけれど、翻訳技術は文学である必要はない。翻訳文そのものが文学になる先に、原作の語学的理会と、その国語の個性的な陰翳を没却するものであってはならない。上田敏さんの技術は感服に堪えぬが、文学を翻訳して、文学を生み出した所に問題がある。われわれは外国詩を理会するための翻訳は別として、今の場合日本の詩の新しい発想法を発見するために、新しい文体を築く手段として、そうした完全な翻訳文の多くを得て、それらの模型によって、多くの詩を作り、その結果新しい詩を築いて行くと言う事を考えているのである。それならば、原詩をそのまま模型とするのが正しいと言う人もあろうし、私もそうは思うが、併しそれでは、日本の詩を作るのでなく、その国々の言葉を以て作る外国詩で、結局日本の詩ではない。私が、こうした詩語詩体論をする理由は、明治十年度から試みはじめられた詩は、結局新しい未来詩を発見する為の努力であったはずである。ところがそれを発見する事が出来ず、発見する道程として、積んで来た努力は、一歩一歩新しい詩体に近づこうとして、ここに凡それを捉える時期に到達したのである。ここでわれわれの前に横わっているものは、翻訳せられた外国詩の多くであって、これが日本の詩のおもむくべき方向を示しているものと言う事に考え到る訣である。外国詩の内容を内容とするに至って、外国詩の様式を様式とし、自ら孕まれる内容こそ思うべきものなのである。

青空文庫情報

底本：「昭和文学全集　第4巻」小学館
1989（平成元）年4月1日初版第1刷発行
1994（平成5）年9月10日初版第2刷発行
入力：門田裕志
校正：仙酔ゑびす
2007年4月4日作成
2012年12月29日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

詩語としての日本語

折口信夫

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/